

ありがたい〈いのち〉と 無慈悲な〈生命〉

長谷川琢哉

HASEGAWA Takuya

一〇二〇年一〇月、親鸞仏教センターで「生まれることを肯定／否定できるのか？——反出生主義をめぐる問い」と題したシンポジウムが開催された。近年話題の反出生主義であるが、ともすれば宗教者が前提としがちな「〈いのち〉はありがたい」といった価値観をあらためて問い直すきわめてラディカルな討論の機会となった。

——「〈いのち〉はありがたい」。それはその通りだろう。生まれたり死んだりといった生死の営みは個々の人間のはからいを超えたもので、人間が操作しようとするのは不遜である、人間が本来できるのは〈いのち〉を賜ることである。こうした主張が一定の意味を有しており、生命の大いなる営みを〈いのち〉として平仮名で表記することの意義も私は理解しているつもりだ。

しかし、である。それでもなお、〈生命〉にはどうしてもなく残酷な側面があることも忘れてはならないのではないか。私たち夫婦は、二年前にそのことを突き付けられた。妻が妊娠中の胎児に問題が発見され、私たちは生むことをあきらめるという決断を行ったのだ。その過程で私たちは深く悩み、その苦しみは今も続いている。その時、たまたまご縁をいただいた遺伝子カウンセラーの先生から、お子さんには遺伝子上の問題があるが、遺伝子に含まれるある種の多様性が、特別な環境においては有利に働くこともあるのだと教えていただいた。それはつまり、子どもに生じた遺伝子上の問題は親のせいではないという慰めの言葉でもあった。しかし私はそれ

を聞き、〈生命〉の恐ろしさをわが身に感じた。〈生命〉(ないし〈種〉)は、自らの存続のために〈個体〉を犠牲にする。それは遺伝子に組み込まれたプログラムであり、考えれば当たり前の話である。そもそも個体の出生・生存の手前には、私たちが意識していないだけで、顕在的・潜在的な無数の個体の犠牲が前提とされている。だとすると、なぜこの当の子供が、〈生命〉の生存戦略の犠牲にならなければならなかったのかという問いに対する答えは、どこにも見つからないことにもなるだろう。

胸の奥に痛みを感じながら、私は上記のシンポジウムを聴講していた。与えられた残りわずかなスペースで、その時の感想を書くことは不可能だ。ただ私が強く感じるのは、〈いのち〉という言葉で〈生命〉の残酷さを覆い隠すべきではないし、生まれることを肯定／否定する、人間の責任の所在をあいまいにすべきではないということである。〈いのち〉が私たちを超越したありがたい贈与であるとしても、同時に私たちは〈生命〉の業を背負い(あるいは背負わされ)、悩み、苦しんでいる。そしてそもそも生を苦しみとしてとらえてきた仏教は、〈生命〉の残酷さを何より直視してきたのではなかったか。私には〈いのち〉の言説によって自分を誤魔化すことはもはやできない。少なくとも、〈生命〉が無慈悲にも〈個体〉に強いる犠牲と、それに絶えず加担しているこの私が抱えるべき矛盾や葛藤から目を背けないようにしたい。

(はせがわ たくや・親鸞仏教センター嘱託研究員) 近年の論文に、「井上円了の仏教改良と真宗大谷派」(『現代と親鸞』第44号)など。